

## 研究ノート

## 新規な有色せつ器素地を用いたテーブルウェアのデザイン開発

山田 圭\*1、長田貢一\*1、山本光男\*2

## Development of Design for Tableware, Using New Colored Stoneware

Kei YAMADA\*1, Koichi OSADA\*1 and Mitsuo YAMAMOTO\*2

Tokoname Ceramic Research Center

常滑産地で用いられる有色せつ器である鑄込み締土と基礎締土とをブレンドし、さらに顔料を添加することで、これまでにない豊かな発色の新規な有色せつ器素地を開発した。一方、若年層に好まれるファッションデザインからミリタリー柄、民族柄、マリン柄、ユーズド加工を抽出するとともに、広く一般に好まれる北欧デザインを採用し、これまで常滑産地で手薄であった食器類のデザイン開発を行った。

## 1. はじめに

低迷する常滑焼を活性化させるため、常滑焼に使用される主要な素地である有色せつ器を見直し、手薄であった食器類へ展開することにより、新たな市場開拓を図る。

常滑産地は江戸時代後期に急須をはじめ様々な茶器製品が作られるようになり、明治時代には土管の生産が隆盛を極め、産地を挙げて取り組むこととなった。しかし食器類の生産については、茶器や土管にあったような大きな動きはなかった。

現在の常滑産地では土管は作られなくなり、茶器は長年に渡り低迷が続いている。このような状況において、常滑が産地として生き延びるためには、これまで積極的に生産されなかった食器類の生産に取り組むことが重要であると考えられる。

常滑産地では食器類には陶器が用いられることが多く、産地の特色である有色せつ器は専ら茶器製品に多用されている。しかし、一般的に有色せつ器の食器類は多く販売されていないため、陶器及び磁器が一般的な市場において、有色せつ器を用いた特色ある食器類は、先進他産地との差別化を図る上で有利であると言える。

このため、本研究では常滑産地にとって物作りの原点である有色せつ器を見直し、新規な有色せつ器素地及び釉薬の開発を行うとともに、特に若年層にアピールするデザインを採用し、新規なテーブルウェアを開発した。

## 2. 実験方法

## 2.1 デザイン調査

新規なテーブルウェアの開発に際し、採用するデザインについて調査を行った。その結果、若年層が好むファッションデザイン、老若男女や時代を問わず好まれる北

欧のデザインを採用することとした。

最近のファッションの傾向として、ミリタリー（柄、スタイル）、民族柄（チマヨ柄、フェアアイル柄、ノルディック柄）、マリン（柄、スタイル）、ダメージ加工（汚し、クラッシュ加工、リペア加工）が多く見られる。また、流行柄には季節的な要素も加味され、ノルディック柄は冬に、マリンは春から夏に好まれる。

北欧のデザインは第二次大戦後世界的に流行し、それ以来常に根強い人気を保っている。特に生活に根ざしたデザインであるため、食器類も北欧デザインまたはそれを意識したものは多い。食器類の傾向としては「シンプルな形状」「豊かな色彩」「異型」などの要素が見られる。

## 2.2 素地土の調製

素地には、22年度に開発した鑄込み締土と基礎締土からなるブレンド土を用いた。ロクロでの成形性は良好であるが薄茶色の色彩を有する鑄込み締土と、ロクロでの成形性に若干難があるが象牙色で顔料混入の効果が良好な基礎締土を用い、双方の短所を相殺し、長所を活かすことを狙った。このブレンド土は器体及び絵付けに用い、1130℃で焼成可能である。

常滑産地では有色せつ器を用いた無釉の製品が多く生産されており、それが大きな特長でもある。しかし、急須や湯呑等では手触り、口を付けた時の感触、茶渋による汚れ軽減などを考慮し、口縁部や器内部に釉薬を施したり、チャラと呼ばれる常滑産地独特の素地と釉薬の中間的性質を持つものを用いたり、バフによる磨き仕上げを施したりする例が見られる。また、特に食器類では、釉薬を用いることにより箸やスプーン等と器体との接触が滑らかになる。

しかし、こうした加工を施すことにより工程が多くな

\*1 常滑窯業技術センター 材料開発室 \*2 常滑窯業技術センター（現産業技術センター 自動車・機械技術室）

るため、本研究ではセルフグレーズのように工程を増やすことなく表面処理が可能な素地の開発も試みた。

### 3. 実験結果及び考察

#### 3.1 デザイン設計

デザイン調査により得られたファッションデザイン、北欧デザインを採用し、デザイン設計を行った。

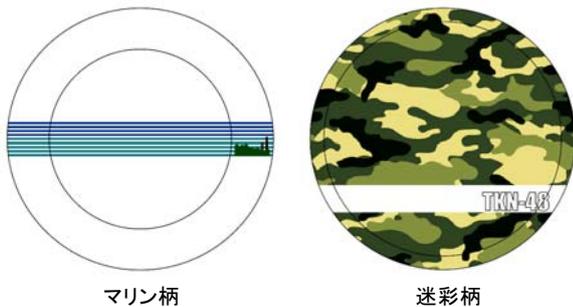


図1 ファッション要素による柄展開

図1にファッション要素による柄展開の例を示す。マリン柄はボーダーが特徴である。例に示した柄は、ボーダーに加え、ワンポイントとして常滑の風景を使用している。迷彩柄は様々なパターンや色彩があるが、ウッドランド・カモフラージュと呼ばれる基本的な迷彩紋様を採用し、食品を引き立たせるよう抑えた色彩としている。



図2 民族柄による柄展開

図2は民族柄であるチマヨ柄をモチーフにした皿の例である。チマヨ柄はニュー・メキシコ州のネイティブ・アメリカンが手織りで作る織物の柄で、独特の幾何学紋様が特徴である。



図3 アンティーク加工

図3はアンティーク加工を施した皿である。古代の遺跡から発掘されたような雰囲気を演出するため、汚し加工とダメージ加工が施されている。

#### 3.2 素地土の開発

セルフグレーズは焼成により素地中に混入した釉薬成分が表出し、ガラス質の層が器体表面を覆うものである。このため、見かけ上は釉薬を施したものと変わらない。しかし、無釉の製品が特徴であるとともに、薄作りで無釉でも水漏れしない有色せつ器の長所をアピールするためには、器体表面をガラス層が覆うのは好ましくなく、バフ仕上げあるいは藻掛け、緋襷などの窯変に見られる程度の艶（グロス）が望ましい。また、この艶により色彩に深みが出ることも期待できる。このため、焼成により器体表面に艶が現れる「セルフグロス素地」の開発を目指し、素地にアルカリ成分や無鉛フリットを混入するなど実験を行っている。

### 4. 結び

常滑産地においてはこれまで手薄であった食器類の生産に対し、新規な有色せつ器を用いるとともに、若年層に好まれるデザインを採用し、新規なテーブルウェアの開発を行った。これにより、伝統的な常滑焼を敬遠していた世代にも受け入れられるとともに、常滑産地の製品全体に対し興味を持ってもらうきっかけになることを期待する。また、有色せつ器を用いて茶器類を生産してきた企業でも容易に参入できるものであり、茶器中心の生産体制に食器類生産が加わることにより、産地企業の活性化が期待できる。

セルフグロス素地については、2年計画である次年度においても引き続き開発を続ける。